

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

A. コースワークの充実・強化

①人材養成目的に沿った科目構成の整理

●名古屋大学理学研究科物質理学専攻物理系

「モノから生体をつなぐ物質科学者養成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

自らの専門分野に留まらない広い視野を養うためにカリキュラムの再編を実施した。生物物理学から物質科学全般にわたる分野の基礎的な問題を俯瞰するために「物性生物物理学特別講義」を開講し、専攻の多数の教員が講義を担当した。また、キャリアパスを含む将来への展望、社会とのかかわりについても考える機会を与えるために「物性生物物理学総合講義」を開講し、アカデミズム以外の分野で活躍する方々を含む学外からの講師の方に講演をお願いした。その他、これらの講義の新設に伴って、専門的な講義科目も再編した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

1. 「物性生物物理学総合講義」では、なるべく広い分野で活躍する方々の話を伺えるように努めた。実際には、産学連携の仕事に携わった経験のある企業の方、弁理士、マスコミで活躍の方、情報産業で活躍する方などをお願いすることができた。また、この講義の目的のひとつは、多くのキャリアパスの可能性を提示して、後期課程への進学率の上昇に資することであったので、なるべく博士の学位を有しておられる方をお願いするように努めた。
2. 「物性生物物理学特別講義」は広い分野全般にわたる講義なので、内容は「広く浅く」なる傾向がある。従って、一方、既存の講義や修士論文判定等において今まで以上に厳格かつ客観的な成績判定を行うように努めた。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

1. 「総合講義」に関しては、かなり広い分野の方の話を聞くことができ、学生のみならず教員にとっても有意義であった。
2. 「特別講義」に関しては、学生の興味を広げるという点で効果が大きかったと考えている。講義後のアンケート結果も概ねよい反応であった。

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

F. その他

②国際シンポジウム等の開催

●名古屋大学理学研究科物質理学専攻物理系

「モノから生体をつなぐ物質科学者養成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

以下のシンポジウム、サマースクールを実施した。

19年度:国際シンポジウム「Science of Molecular Assembly and Biomolecular Systems」(19年11月30日—12月1日、名古屋大学)

20年度:「1st Nagoya Summer School on Science of Molecular Assembly and Biomolecular Systems」(20年8月19日—21日、岡崎)

21年度:「2nd Nagoya Summer School on Science of Molecular Assembly and Biomolecular Systems」(21年9月16日—18日、名古屋)

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

1. 学生の幅広い視野を養うために、シンポジウム、スクールともに生物物理学から物質科学にまたがる幅広いテーマの講演、講義を用意した。
2. 特にサマースクールにおいては、講師だけではなく大学院生も海外から招き、名古屋大学の海外での存在感を高めるとともに、大学院生が直接海外の同世代の学生とふれあい、議論することができる機会とした。また、泊まり込みで実施し、参加者間の密度の濃い意見交換ができるように努めた。
3. 大学院生が極力英語を話す機会を増やすように、2nd Summer School ではポスター発表者全員が英語による preview を行った。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

1. 学生の興味を広げるという点では一定の効果があったと考えている。アンケート結果も好意的な意見が多かった。
2. 全般的な効果を測ることは難しいが、明らかに英語による発表が改善した例が見られた。
3. 海外からの大学院入学志望者が増加している。逆に、当専攻で学位取得後に海外でPDを経験する学生も現れた。